



# 初めての 国勢調査

(写真提供・黒牟田・梶原太郎さん)



▲ 大正9年10月1日、現在の本町にあった有田村役場前で。前列右から4番目が館林源右衛門村長

昨年の企画展の折り、展示中の写真をご覧になった大野の田代秋子さんから「第1回国勢調査の調査員として参加した父田代善吾が持っていたもの」だと「記念録(全3巻)」を寄贈していただきました。この中の第3巻は佐賀県の特集で各地区の調査員の顔写真と経歴が記されています。企画展の写真は旧有田村の全調査員が記念写真をとっていたもので、旧有田町のほうはありませんでした。

国勢調査とはどういうものだったのでしょうか。

すでに明治35年(1902)に第16回帝国議会において「国勢調査ニ関スル法律」が制定公布され、同38年に第1回調査が行われる予定でしたが、前の年に日露戦争が起きたので先に延ばされました。しかし、その後各界から調査要求がなされ、ようやく大正9年10月1日に日本で初めての国勢調査が実施されました。

この時の有田での取り組みは、旧有田町役場と旧有田村役場の日誌から読み取ることができます。まず旧有田町では8月3日午後1時より第1回協議会を開催。同6日には「趣旨宣伝普及のため小学校に於いて町民全部を集め、講演会を開催す。会する者1020名」とあります。そして前日には、宣伝のため陶山神社境内において煙火を打ち上げています。

一方旧有田村のほうでも同様に協議会や講演会を開いていますが、調査前日の9月30日には「午前零時現

在に依り全国一斉国勢調査執行時の統一のため帝国窯業株式会社汽笛並びに善福院の鐘・各区の太鼓打ち出す」とあり、有田地区全体の意気込みがわかります。

この時の調査項目は氏名・性別・出生年月日・職業などの8項目でした。調査員は前述の田代善吾さんのほかに旧有田村では館林源右衛門村長や池田仁三郎さん等10人。旧有田町は西山積助さんや光武庄作さん等13人で、区長や議員を中心とした名誉職の待遇でした。この調査の結果旧有田村の世帯数713戸で人口は3,557人、旧有田町の世帯数1,711戸で人口5,285人であることがわかりました。

明治5年1月29日に行われた壬申戸籍で、初めて全国的な調査が行われた後、近代化を進めていた日本ですが、その後は正確な調査は行われずじまいでした。そこでこの国勢調査は国民生活の文化的発展と善政を行うために、為政者はまず国の実情を明らかにした統計的知識を持たねばならないとし、国の施政方針は国勢調査の結果によって始めてその基礎が定まると考えられたのです。

この写真は、有田の、日本の近代化に尽力していた人々の自信に満ちた記念の一枚といえます。



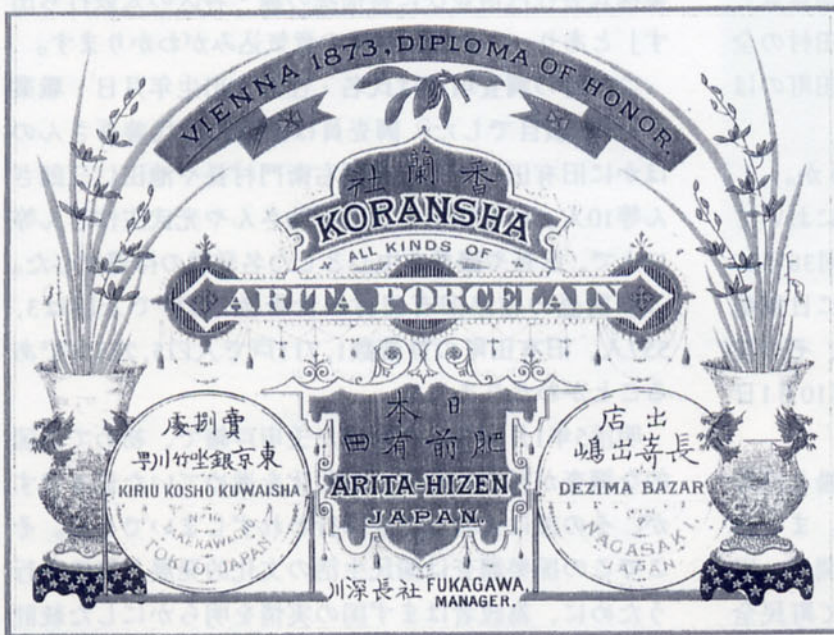
大正期の有田や人口、町の動きについての資料は上記の「日本国勢調査記念録(全3巻)」のほかに、「有田町史 政治・社会編Ⅱ」、「西松浦郡誌」に記述があります。

# 皿 山 春 No.41

# ラベルに浮かぶ皿山群像

## 万国博をバネに文明開化

合本組織とっていた明治初期の香蘭社が作ったとみられるラベルが、このほど奈良市内の旧家で見つかりました。大阪市北区西天満に住む幕末史研究家、多田敏捷さんの調査によるもので、米国独立百周年を記念した1876年（明治9）のフィラデルフィア万国博の出品物に貼ったものようです。大きさは横14センチ、縦10.6センチ。当時日本では難しかったであろう石版印刷の多色刷りです。色もさほどあわせていず、子細に見てみると、文明開花の上昇気流に乗って飛躍を図ろうとした有田皿山の心意気が読み取れます。



の大花瓶や赤絵付けの紅茶碗などは高い評価を受け、陶磁器部門の金賞牌に輝きました。そのうちの紅茶碗は8代深川栄左衛門の出品でしたので、「名誉の賞」とはそれをいうのでしょうか。

### ◇久米邦武の分析

19世紀はテクノロジーの世紀でした。各国は科学と工学の分野で新技術を競い、その精華を誇示する舞台が万博でした。1851年の第1回ロンドン博の会場は巨大な温室を思わせる建物で、観衆に鉄とガラスの時代の到来を印象づけました。主宰者であった英国女王はその日記に「地球上のすべての国々の工業を結び合わせた平和の祭典」と書いたそうですが、万博は「産業と工業のオリンピック」でもあったのです。

このようなイベントに、文明開化と殖産興業を国策としていた明治政府は強い関心を抱いたのですが、会場で先ず思い知らされたのは余りにも大きい技術水準の差でした。それを端的に説明しているのが有田と縁の深い歴史学者久米邦武の報告書です。欧米歴訪の岩倉具視使節団に随行してウィーン博を訪れた久米は、著名なレポート「米欧回覧実記」の中で欧米の先進文明に詳しくふれ、日本の出品物の人気が集まるのは欧米人の目に珍奇に映るからで、本質的な声価が高いわけではないと書いています。焼き物についても「陶器ノ誉レ高シ。ソノ質ノ堅牢ニシテ製作ノ巨大ナルニヨルノミ。火度ノ吟味、顔料ノ取合、画法ノ研究ナド、ミナ門戸ヲモ窺フニ足ラズ」と分析しています。

そうしたことから明治政権は、「一周遅れ」の感があった工業生産物の出品は控え目にし、特異性がきわ

### ◇ウィーン博の栄光

ラベルには上段に「ウィーン・1873・名誉の賞」、中段に「有田磁器よろず扱ひ香蘭社」とあり、下段に右から「出店長崎出嶋 デジマ・バザール」、「日本肥前有田」、「売捌處（うりさばきしよ）東京銀座竹川町キリュウ・コウショウ・クワイシャ（起立工商会社）」と、英語、日本語、ローマ字で書いてあります。そして左右の縁には金、緑、赤、黒の4色による花瓶とランの花のイラスト。

「ウィーン・1873」とは、その年（明治6）にオーストリアの首都ウィーンで開かれた万国博覧会を指しています。ドナウ川に沿うプラーター公園で開かれたこの万博は、日本政府が初めて正式に参加したものでした。事務総裁に大隈重信、副総裁に佐野常民と佐賀県人が主要ポストを占めたことも記憶されてよいでしょう。佐野は約70人の一行を率い、現地で日本館の設営にあたりました。政府が買い付けて出品した有田焼

だつ伝統産業製品に重きを置くと同時に、欧米の先進技術に学び、産業の近代化に役立つ資料を得ることに総力を挙げました。

### ◇納富介次郎と川原忠次郎

ウィーン博には多くの実技者が派遣されています。焼き物では、後に佐賀県立工業学校長になって有田工業学校の設立に尽くした納富介次郎、有田皿山で酒造株を持っていた川原善之助の4男忠次郎、それに京都の丹山陸郎の3人。納富は絵つけ、あとの2人は製陶法が専門でした。かれらは顧問として同行したドイツ人化学者ワグネルの斡旋で、ボヘミアのエルボーゲン製陶所やフランスのセーブル製陶所などで、石膏型による鋳型製法、機械ロクロによる成形技術などを研修し、納富と川原は帰国すると、内務省の勸業寮に全国から陶工を選抜して集めて新技術を伝えました。これによって零細な個人の仕事であった窯業が次第に企業化し、量産への道を歩むことになりました。

納富はさらに有田に来て、次に予定されていたフィラデルフィア博のために図案などを指導しました。これと前後して久米も訪れ、出品に皿山の力を一つにするには会社組織が不可欠なこと、貿易の実務は実地でしか体得できないから、費用を惜しまずに関係者を現地へ送ること、などをアドバイスしました。それによって明治8年に設立されたのが合本組織香蘭社です。8代深川栄左衛門、深海墨之助・竹治兄弟、辻勝蔵、手塚亀之助といった、商人と窯焼きのベストオーダーを組んでの企業化でした。

### ◇政商・松尾儀助の業績

ここで日本最初の貿易会社ともいえる起立工商会社との関わりが生じます。社長松尾儀助は佐賀藩足軽松尾儀八の子で1836年（天保7）の生まれ。1867年（慶応3）のバリ博に佐賀藩出品物の販売主任として渡仏して客死した佐賀市の薬種商野中元右衛門店の番頭でしたが、やがて長崎で嬉野茶の輸出を手がけ、遊学中の大隈重信と親しくなります。ウィーン博には茶業調査のために派遣されたのですが、日本の美術工芸品に欧米人の興味が集まるのを目の当たりにすると、さっそく佐野常民の協力を得て陶磁器、青銅製品、漆器などを直輸出する半官半民の貿易会社を設立しました。それが起立工商会社で、明治7年3月、浅草に事務所を開き、同年11月から竹川町16番地（銀座7丁目）に移転。フィラデルフィア博では有田焼を一手に販売して利益を上げます。今回発見されたラベルはその時のものでしょう。松尾は輸出工芸品を仕入れただけでなく

直営工場で製造もし、焼き物でいえば、井上良斎（東京）、三浦乾也（同）、宮川香山（横浜）といった著名な陶芸家がそこで働いたといわれています。

ひとりの起立工商会社は、ニューヨークとパリに支店をもつほどの勢いでした。それが海外での資金ぐりが滞ったことなどから明治24年に社史を閉じます。ただ、17年の短命とはいえ、貿易立国に先鞭をつけ、維新後の困窮にあえいでいた工芸家に活路を与えた政商松尾儀助の功績は誠に大きいとされます。

### ◇フィラデルフィア博—日用飲食器で勝負

フィラデルフィア博への有田の出品で特徴的なことは自費出品だったことです。ウィーン博までの出品物は藩や政府が費用を負担して作らせたり集めたりしたものでした。自費出品となりますと果実も大きい代わりにリスクも大きい。それをあえて挑戦したところに皿山人の心意気を感じます。しかも「日本の陶器で海外に輸出されるのは趣味の具がほとんどで、西洋向けの日用品を作らねば大きな利益を得られない」という「ウィーン博報告書」の主旨に沿い、比重を美術品から飲食用器に移しての参加でした。やがて品物が整いますと、明治9年の年明け早々、深海（墨之助）、手塚、栄左衛門の女婿深川卯三郎の3人が通訳をつれてフィラデルフィアへ旅立ちました。

### ◇深海墨之助と米国紳士

主会場はフィラデルフィア市郊外のフェアモント公園。ミシン、タイプライターなどの工業製品が注目を集めた中で、瓦ぶき屋形風の日本館に展示された有田焼も好評でした。フランスの名窯セーブルの製品よりも高い値段がついたほどで、「日用飲食器で勝負」という目標が果たされました。会場では、深海墨之助とアメリカの愛陶家との間で、次のようなやりとりもあったと「精磁会社伝記」は伝えています。

「千弗ノ花瓶ヲ賞翫シ買ワント欲スル人モ多カリシ中ニ、米国ノ紳士一人来タリ。巧致ノ絶妙ヲ極メタル要点ヲ指シテ称赞スル言ノ、一ツツ君（深海）ノ命意ノアル所ニ的中スル、符ヲ合スルノ如シ。ヨリテソノツツヲ八百弗ニテ譲リ与エンコトヲ懇望ス。君深ク悦ビ、コレマデ諸人ノ評アリシモ賓客ノ鑑識ノ如キモノナシ。コレ真ニコノ器ノ主ナレバ望ミニ任セ与ウベシ。タダシ価ハ場中ノ法アレバ、ヤハリ千弗ニテ求メラレヨ。余ハコノ器ノ良主ヲ得タルヲ賀シ、併セテ鑑賞ノ報酬ニ金二百弗ヲ進ムベシト答エシニ、ソノ人限りナク喜ビテ買イ去レリ……」

味のある話です。墨之助31歳のときでした。

## ご存じの方、教えてください

有田でよく言われる言葉に「わーがた（自分の家）の雪隠と一口浄瑠璃ば知らんもんはおらん」があります。窯元や商店の主人はもちろん、職人も浄瑠璃くらいは語れたというほど、芸事は盛んだったようで、そんな風土の中で、詠み人知らずの歌が出来ていたようです。例えば、戦前の陶器市では明治33年にできた鉄道唱歌の節回しで1番から6番までの「陶器市の歌」があり、子供たちはこの歌をうたいながら旗行列をして賑わいに花を添えていたそうです。

有田町5区には昭和の始めから受け継がれているという蛇踊りがあります。現在は10月の皿山まつり（おくんち）の時に子供たちを中心に行われますが、その時に歌われた「黒髪大蛇退治の歌」というものがあったそうです。有田蛇踊り保存会代表で当館協議会委員でもある久富桃太郎さんから「去年の佐賀県伝承芸能祭では長老の方に1番と2番をうたってもらったが本来は7番まであったらしいので、ご存じの方は是非教えてください」という依頼がありました。

1番と2番の歌詞はつぎの通りです。

- (1) むかしむかしその昔 有田の里の山奥に  
黒髪山におろち住み 天童岩を巻きました  
七巻き半もホイホイのホイ
- (2) 鎮西八郎白川谷に 家来を集めて大評定  
狙い定めて矢を放ち 大蛇は遂に死んだとき  
鎮西八郎為朝ホイホイのホイ

今後保存会のテーマソングにしたいということですので、この歌の記憶がある方は有田町歴史民俗資料館（☎43-2678）か、久富さん（☎42-2006）までご連絡ください。



平成10年10月のおくんちで披露された蛇踊り

## 寄贈資料の紹介

- |               |      |          |
|---------------|------|----------|
| ◆掛け軸（川崎千虎画）1点 | 岩谷川内 | 山口 秀市様   |
| ◆染付大皿 1点      | 赤坂   | 椋露地英明様   |
| ◆大太鼓 1点       | 南山   | 馬場昭三様    |
| ◆書籍 1点        | 大野   | 田代 秋子様   |
| ◆カメラなど 2点     | 佐世保市 | 貞包 勝様    |
| ◆浴衣 1点        | 同上   | 久富 節子様   |
| ◆品評会褒賞証 1点    | 大樽   | 有田商工会議所様 |
| ◆段通など 4点      | 大樽   | 手塚 信雄様   |
| ◆書籍 9点        | 泉山   | 黒川 弘文様   |
| ◆書籍 102点      | 菅野   | 松尾 信一様   |

このほか赤絵町 今泉今右衛門様より作品とエッセーをまとめた書籍「13代 今泉今右衛門作品集」をいただきました。ありがとうございました。

## 濃筆のつばやき

年が明けると昔のくらしを勉強するために、小学校の子供たちが資料館にやって来ます。今年も中部小学校の3年生が電車を使って上ってきました。後日感想を寄せてくれた中で大安智世さんは「昔は機械ではなくて道具をつかっていたことがわかった」と書いてくれました。何気ない言葉ですが、深く感じるどころがありました。3年生の皆さん、ありがとう。（葉）

## 参加者募集中！

ご自宅の床の間に掛けられている掛け軸はどのように取り扱っていらっしゃいますか？

掛け軸の巻き方、風鎮の取り扱い、真贋の見分け方など講師をお招きして、下記の要領で正しい掛け軸の取り扱いの講習会を開催します。

この機会に正しい取り扱いをマスターしてみませんか。多くの方々の参加をお待ちしています。

- ・日 時 平成11年3月14日（日）  
午後1時30分～3時
- ・場 所 有田町歴史民俗資料館
- ・講 師 佐賀県文化財課 福井尚寿先生
- ・参加人員 先着20名まで
- ・申し込みは3月10日までに資料館まで電話でお願いします。（☎43-2678）

## 季刊『皿山』

通巻41号（平成11年3月1日）  
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1  
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185